月に叢雲　花に嵐　松に鶴　牡丹に唐獅子　竹に虎

「と」に似たれども「と」は並列なり。「に」は上又は近くにひつつくる也。添加なり。「と」は離れ「に」はつく。

郭公一聲とこそ思ひし。に待ち得てかはる我が心かな（續千載）接續助詞逆態ノニの意也。但し逆態ならざる例もかなり存在するを以て、すべて逆態と速斷すべからず。實際については格助詞の上に、名詞を省きたると紛るゝ場合多し。

雨が降るに。何をしてゐるぞ　（口語同上）

體言と用言との關係を示す格助詞としては一、所在所自所向所歸を示し、二、比較を示し、三、にての意を示し四、添加也。

机に載す	心に思ふ	花に匂がある	所在　於乎
人に擊たる。	病に惱まさる。	所　於	
人に與ふ	仕事にかゝる	所向　乎于於	
湯を水になす	鳥を鷲にいひなす	所歸　於	
帶に短し襷に長し		比較　於	
仁和寺の僧正におはす人		にての意用法古し	

待ちに待つた
越すにこされぬ　動詞の添加

右は主要なるものなり。悉くは擧げ難し。以上は動詞に意味ありて「に」には何の意味もなきが如く思ふ人もあらんが、左にあらず。試みに「に」の代りに「を」を用ふれば如何。文意通ぜざるに非ずや。又「と」に似たるあり、「より」に似たるもあり。試に考へらるべし。八木立禮歌文樞要にて「になる」「となる」の別を立てて、自然と不自然の別あるやう說きたれども、首肯しがたし。和文調に「になる」「になす」多く、漢文調に「となる」「となす」多きこと確かなり。古今雜下あすか川の下句、古本は「瀨となる」となり八代集はこれにより、遠鏡・正義皆「瀨になる」とあり。「に」は奈に行して音なだらかなれば歌としては此の方上出來也。にの下になありてその下にるといふ圓轉なる音あり以て上の句の堅きを和ぐるゆゑ、「になる」の方よし。なほ「と」の部にて說く所あるべし。

五と、格助詞と接續助詞とに大別す。先づ格助詞より述べん。格助詞を二分す。一は與をもて示し、一は止を以て表す。

與に三義あり。一並列二伴侶三比較是也、

月と花とをめづ。		並列
大伴等佐伯氏者人祖乃	（萬葉十八）	並列
友と語る		伴侶
獨見るより人と見よう		伴侶

甲は乙と等し　比較
來ないのと同じい　比較

並列は同等のものをならぶる也。與介字也。凡以聯二名代諸字之平列一者(馬氏文通卷七の三二頁)とある如く、名詞代名詞の平等に列べるものを聯ぬる也。萬葉十八陸奥に黃金が出でしを賀し奉りたる家持の歌にもある通り等の假字は實にうまく用ひたり。是れ爾と根本的差異也。

月と雲　(並列)　月に雲　(添加)

「松の木と蟬」とは言はず。もし言はゞ兩方相等しき程の物ならざるべからず。相接近の意無し。とは外也、には遍(チカシ)也。

「と」は等しきものを並列する意より、最終の語句の下の「と」と雖も、之を省くべからず。五人の客の中四人に膳部を前に据ゑながら一人の客の前を空にせば如何。「と」の用例これと相似たり。然るに引例にある萬葉の長歌の如きは佐伯の下に「と」を省けり。此の用法古へよりありし也。許容例十三誤解を生ぜざる限り省くもよしとは卽ちこの例の如し。意味より考へて大伴と佐伯の氏とはと解く人は頭のどうかせる人也。大伴と佐伯との氏は、かく誰も解すること疑無し。

友と語る　(伴侶)　友に語る　(所向)
これと同じ　これに同じ

上は對等に比べ、下は一方を主にして較ぶ。胥をアヒ・トモニ・アヒヒキテとよみ同等のものが集る也。もと蟹の足の義也。相はアヒとよめども夕スクル義也。宰相とは天子を輔くる也。故に「と」は胥に似「に」は相に近し。

止に二つの用例あり。上を受け止めて下の動詞につゞくなるがその動詞を省かざるは普通にして省くを變體とす。「と」に止の假字は實に善く當てたるもの也。止の音シそれがタ行のチに通じ更にトに通じたるといふ說は假名源流考の大矢博士の意見にして實に確なる根據あり。此の受けとめの「シ」より下につゞく動詞は視聽言動止其他萬般の動詞也。富士谷成章は「五つのと」と謂へり。とみる・ときく・といふ・とおもふ・とするの五なり。されどこはその重なるをいへるまでにして五つに限るべからず。五つ中尙ほ重なるものをいへば「と言ふ」と「と思ふ」との二つ也。その證據は「とて」を譯するに「といつて」又「とおもつて」とすれば也。かく繁く使はるる動詞は省略せらるるに至るなり。言ふ・思ふ・爲る化る・あり・等是れ也。こは後にいふべし。

動詞を省かざる用例は甚だ多し。口語法別記三二五頁にあり。其一つ二つを引用せん。

行くときめる。來ぬと見える。

書物をと望む。(「と」の上の動詞は省きたれども「と」の下は省かず。望むは是れ也)

僅かと思はれる　やあと呼びかけた。

詞の玉緒卷五の十九頁の例の一つ二つ。

ひとめ見し君もやくるとさくら花けふはまちみてちらばちらなん　(古今二)

かゞみ山いざ立ちよりて見てゆかん年へぬる身はおいやしぬると　(古今十七)　倒裝法也。

これを指定と名づく。稍趣のかはれる用例あり、轉化と稱す。

水が湯となる　木が石と化する　敵を身方とする

次に動詞を重用する「と」あり。

降りと降る　ありとある。

以上轉化重用の「と」は「に」と相似たり。

水湯となる（轉化）　水湯になる（所歸）

降りとふる　ふりにふる。

「と」の下の動詞の意義によりて一指定二轉化三重用と小分せるまでにて形としては一つ也。

「と」の下の動詞を省略せる用例につきて述べん。

今すぐにいくと（いふのか）

なに苦しいと（いふのか）

萬人皆その德を稱へけりとぞ（いふなる）

暮ると）して）あくと（して）目かれぬものを梅の花いつのひとまにうつろひぬらむ（古今一）（玉の緒五の二三頁引用廣文典一七二頁引用）

玉の緒「とて」の意と解すれども、實は「として」又は「とありて」の略也。

起くとは歎き寢とは思ばむ。としてはの略也。

松嵐花の跡とひて雪と降り雨となる哀猿雲に叫んでは腸をたつとかや心すごの氣色や（謠曲鞍馬天狗）

雪と化りて降る也。たつとか言ふことや也。

これを廣文典には別々に擧げ一方をとてとし一方をの如く（比喩）と見たり。未だ概括し足らざる也。此の用例古くは

瀰磨紀異利寐胡播椰。飫廼餌鳥塢。志齊務苦農殊末句志羅珥比賣那素寐殊望（崇神紀十一年）

みまきいりびこ（崇神天皇）はいのう。おのれがを（命）を殺さうと盗むのを知らずに、宮女たちと遊びなさつてゐるよなあ。これを古事記と比較するに後の方遙かに優れり。而して「と」の下の動詞を言はざる所最も詩趣豊かなるを見る。

古波夜、美麻紀伊理毘古波夜。美麻紀伊理毘古波夜。意能賀袁袁。奴須美斯勢牟登。斯理都斗用。伊由岐多賀比。麻幣都斗用。伊由岐多賀比。宇迦迦波久、斯良爾登。美麻紀伊理毘古波夜（記中卷）

御名を二回「はや」を三回反復せり。死せんとは殺さん意也。後つ戸前つ戸の對句を用ふ。行き交ひて窺ふその叛逆人埴安彦を御存知なくて……御名を呼び奉つて歎じたる也。姫遊び云々は言はぬが詩の上乘也。「と」の下の「姫遊す」を省きたる例也。四道將軍の派遣もうつかり出來ず禍顓臾に非ずして蕭牆之内に在れば也。

大王能等保乃朝廷等斯良農比（萬五）

須賣呂伎能等保能朝廷等可良國爾（萬十五及十八）

「とある」の意也。

「に」「と」を副詞の下につきたる助詞と見る說は誤也。昭和二年高等教員の試驗に出でたる問題にして國語調査委

員も助詞と見(口語法別記三二六頁)其他有力なる學者も助詞と說きたるあれど誤なることは明か也。古事記に許袁呂許袁呂邇佐。和佐和邇。登遠遠登遠遠爾。擬聲語の副詞は邇を加へて一語たる也。故に邇は副詞の語尾也。助詞とすべからず。擬聲その物は副詞の語幹にして一語とは見られざる也。故に「と」は語尾なれば助詞としては之に言及せざるを良しとす。

以上は文語口語共通なるが、口語のみの特例あり。

我と我身を恨む。

規則とある上は守らう

教育者ともあらうものが不埒にも……

デの意に解す。原を繹ぬれば我こして・規則として・教育者としての省略なれば前に說きたる中に入る。

玉の緒(五の十九頁)に「と」はすべて切るる語をつゞくるてにをは也。さる故に上のてにをはの調では、大かた「と」より下へは及ばざる也とあり。係結も「と」にて受け止めたる下は治外法權といふこと也。「と」までにて「と」の關を越ゆれば係りの力がそこに及ばざるの謂なり。前に引ける「ひとめ見し」の歌「や」の結はくる(連體形)「と」の上にて結びたり。

受け止むるには文句の切るる所よりす。終止形連體形(ぞなんやかの係結のある)已然形(こその係結のある)命令形より「と」につゞく。「と」は推量の助動詞及びやかしなどと承接を等しうす。

うしと見し世ぞ今は戀しき。　終止形よりつゞく

我おちにきと人に語るな。　同上

人目も草もかれぬと思へば。　同上

春やとき花やおそきと(係結の終りたる下につゞく)

共にこそ花をも見めと待つ人の來ぬものゆゑにをしき春かな(後撰春下)(係結の終りたるにつゞく)

早く乘りたまへと勸められたので、(命令形の下につゞく。)

終止と連體とは早く平安朝の末より混同して用ひられたりしゆゑ。終止形より「と」につゞくるを連體形よりつゞくる用例生じ、破格たりしが、例の許容せられたり。許容例十二は即是れ也。制限あり。形容詞の連體形よりつゞくるは許容せられず。推量指定否定希望の助動詞の連體形よりも同樣なり。

接續助詞の「と」は「とも」の略のと(文語)ときにの略のと(口語)此の二つなり。

たのめずば人をまつちの山なりとねなましものをいざよひの月　新古今(玉緒五の二四頁)

繪にかくと筆も及ばじをとめごが花の姿を誰にみせまし　堀川後百首　(同上)

あらしのみふくめる宿に花すゝきほに出でたりとかひやなからん　かげろふ日記　(同上)

あいぎやうなくこ詞しなめきなどいへば、いはるる人もきく人もわらふ。(枕草子文ことばなめきの段)

前後の意味をも考へ「とも」の意にさとるべし。

打つと響く　落すとこはれよう

逃げると追ふ　見るといけませぬ

餘り長いと切られる　めづらしいともてはやされる　押されると倒れる　讀ませると分る　早く行かぬと間に

合はぬ　明日は休みだといふ　（口語法別記三六八頁）

「打てば」「長ければ」「押されれば」「の意なり。

- と
  - 格助詞
    - 與
      - 並列
      - 伴侶
      - 比較
    - 止の下に於ける
      - 動詞を省かざる用例
        - 指定
        - 轉化
        - 重用
      - 動詞を省く用例——
        - いふの畧
        - しての畧
        - ありの畧
        - 化りの畧（比喩）
        - すの畧
  - 接續助詞
    - ともの意（文語）
    - ときにの畧・ばの意（口語）

○は「に」と相類似せるを示す。

【問題】 契沖の假名遣に關する意見を述べよ。（大正元年第二十六回豫備）

假名遣は古書を標準とする意見にして、之を歴史的假名遣といふ。

【備考】 假名遣について四種の態度あり。一は語勢的假名遣といひて平上去入の四聲即ち音の輕重アクセントたよりて標準を定むる態度を採るもの、之は定家假名遣又は行阿假名遣といふ。親行が起稿定家校閲行阿（親行の孫）の增補せるもの也。二は歴史的假名遣にして紀記萬葉等の古書を據とするもの。後村上天皇の頃僧成俊萬葉を研究し定家假名遣に對し疑惑を抱き、古書に據るきべ記を立て契沖之を承け後榊取魚彦の古言梯にて完成したり。三は假名遣の如きは如何樣にても差支なしとする態度にして靈詮通の著者上田秋成之に屬す。梅咲きぬどれはうめやらむめぢややら也。四は表音的假名遣とす。明治以後西洋の言語學發音學研究の結果唱へ出されたるものにして、發音通り表記せんとする態度なり。

【備考二】 和字正濫抄　五卷、元祿六年の著。卷一は自分の立場を明にしたる說明也。先づ「親行も世俗流布の假名にまかせられたるか、又行阿の添へられたる中にあやまり出來たるか」など極て穏かに言ひて一言も定家の攻擊に觸れざりし也。次に「中葉より以來學識倶に降りて、且つ竄を致さず。遂に則ち翅にい・ゐ・を・お等を混ずるのみならず、四位を椎に寄せ逢を藍に寄せ、本居を懸に寄するに迄れり。縱令斧正の手あるも、典據明かならず、訛謬多し。余之を懷に介むこと久し矣。（原漢文）と序文にあり。卷二い・ゐ・ひ卷三を・お・ほ。卷四えゑへ・わはう卷五ふ次にむ・うの紛れうむかよふ類ちじづずまで語を並べたり。日本紀より三代實錄に至るまでの國史・舊事記・古事記・萬葉集・新撰萬葉集・古語拾遺・延喜式和歌集・古今集及び諸家集に據れるよし自ら記せり。印度の悉曇（シツタン）（音韻學）に精しくして、漢字の四聲と我國語との關係は淺く、そたよりも印度の語の方國語に親密なるよし述べられたり。おをの所屬は前にいへる如く略本和名鈔には誤なかりしが、その後誤り來り「を」をあ行に「お」をわ行に入れたりしを契沖も之を襲用し、榊取魚彦も亦同じ誤に陷りしが宣長の假字用格はて訂正され僧義門の於手輕重義（一冊）にて愈明瞭に論定せられたり。

【備考三】 假名文字遣（島本一冊）美濃紙綴三十五枚の本也。前にいへる定家假名遣の一名也。千六百七十語を排列せり。一「を」これに百八十九の語を並べ中には源氏伊勢物語といふ出典をあげたる語二つ程あり。その標準は一は音の輕重によりたるものと見ゆ、をの右に中違と書けり。されどその下に越を緒小と書せるを見れば、これ等基本の字に概括せるところ獨斷の所爲とも思はれず。草書に書きて下に楷書を書きたる所を見れば、和歌に用ひ來りしを根據とせしものの如し。たゞ音韻の學契沖の如くあらざりし爲誤ありし也。二お奥と右肩に書したるはいろはの順を示したる也。下にお於尾鳥雄呼と根本になる文學を書せり。

百四十八語擧げたりその尾烏滸呼を「お」の中に入れしは誤の本なり。故に缺陷は「お」の部に多し。他にはそれ程も誤なくして、よく排列せり。三江肩に中とかき、え盈。緣枝衣と根本になる字を書し百三十五語前と同じく二段に記せり。それ等の記しも契沖の和字正濫鈔もこれに模したりと思はる。四ゑ奥と右肩にありて惠・曾・營衛とありて五十八語、五へ右肩に端邊返遍經部と書きて、百十五語。六ひ奥右肩飛田火悲非鄂比百二十一語七い端(右肩)伊以已夷意異二百五十六語八ゐ中(右肩)井居進爲妻百〇三語九ほ端右肩保本帖穂六十語あり。これ以下は右肩に何等記入なし。十ヲ輪二十二語三輪組(老人のこと)の說あり。十一は波半端葉百〇九語。十二む武無旡ん鉾牟。三十六語。十三う宇卯得ロ(うにかよふ)羽鷁百十一語。十四、ふ不希婦風府百四十二個あり。目次に「定家卿口傳」、「人丸歌抄」とあれど一向見當らず。行阿假名遣即ち定家假名遣なるものはその一、他の一は音の輕重によりしものなり。

定定家假名遣京大圖書館にあるのは、天文廿一重陽前日記之稱名野釋と奥書ある美濃紙大の古寫本で、表紙に定家假名遣とあつて、この内容はちとかはつてゐる。岡崎圖書館のは假名文字遣とあつて、をなどの字に中とか奥とか肩書があつた、後で書いたものにちがひない。斯道の方に聞かねばわからぬが、獨斷的ないい加減なものでないことだけは確實である。和歌は音の輕重に最も關係がある。否和歌のみならず、誦ずるものは皆さうである。親鸞上人が一字のときはヲと書き、下に他の天仁波につゞく時はオバオヤオモとオを用ひたのは、連用のときは、音が輕くなるその用意と推察される。古事記のことはあまり古いからさし置き、類聚名義抄に・淸・濁平上去を示したのは音の輕重が院政以後相當注意された結果なのである。「を・お」の部が一番批離があるのだが、作歌の上でお の輕い時に「お」を用ひ重い時に「を」を用ひたからとて、見方一つで是語も出來よう。このあたり今少し研究しないではなるまい。

【備考四】　悅目抄　群書類從聚に收められる。十訓抄には悅目抄そのまゝの文章を多く取れり。藤原基俊の歌學書にして作歌の用意題目歌枕緣語やすめ字八病歌の諸體天仁遠波禁忌等につきて論述せり。假名遣としては上にかくい、下にかくひ、口合にかくゐ上にかくわ、下にかくは上にかくお下にかくを上にかくう下にかくふ上にかくえ下にかくへ口合にかくゑといふことをいへり。今傳はつてゐる悅目抄の後世の假托の書であることは、(吉澤博士著國語國文の研究一九一頁)によれば殆ど定議になつてゐると見えてある。

【備考五】　假名遣及假名字體沿革史料(大矢博士著)によると、その二番目にある法華文句(唐鏡中沙門神迦著)天平時代を少しく降れる程のものといふのに、和行のウは于と書き阿行のウはヌナ(有の略と思ふ)と書いて、はつきり區別されてある。阿行のウと和行のウとは一番早く混同したものであるが、奈良朝の末までは發音をも區別し、又有字汙烏?禹?と注意して書いてある。これは餘程古いもので阿行のイは尹ヨヲと書き、儒をナセと傍に書いてある。ハカセのことである。この好資料を得ながら、千慮の一失ともいはうか。大矢博士は頭から此の二つを混じて一つとして居られるのが、實に惜しいことである。ウを阿行につかふのは兩者の混じてから後のことでその前、阿行のウにはナといふ假字の略があつた證據である。このことは從來學者があまり唱へないことだから、ここに一言して置く。

【備考六】　沙門空海の著沙門勝道歷山瑩玄珠碑を見るに、多く平假名をつかつてゐる。以を用ひ阿行の伊は用ひてない。安以お加ゐえ久ゐ左し寸曾ゐちぬてとな御ぬゐは比ほ萬見女やる良りゐ禮呂和ゑ乎これだけ用ひてゐる。この前後(沿革史料に於ける)は大抵片假名であるのに、空海に限つて平假名が多い。これ空海をいろは歌の作者だと類推した一因かとも思ふ。

【備考七】　この史料によると片假名の方が多くて、ぼつ〳〵平假名がところ〴〵に用ひられてある。なほこの事は右の史料と共に吉澤博士著國語國文の研究一八一頁「音圖及手習詞歌考を讀む」を參考されたい。假名遣のことを書きたる先驅なり。武人が都に入り來るなどして、言語混亂を生じ、言語と文學と相隔れるを以て、詠歌の必要上に促されて生じ、それらが傳はりて定家に至りたるを、親行之を纏めて起草し、定家に見せしところ、全くそれにてよしといふことに孫の行阿がそれに「ほ・お・わ・は・む

う・ふ」の部を增補したりと傳へらる。

【備考八】　藤原基俊　白河天皇頃の歌人にして和歌をよくし歌合の判者として仰がれしこと屢々なりしが性傲慢にして嘲罵を好み、酷評を試み、人に憎まる。官は左衞門佐を以て終り生沒年月明かならず。歌は千載集に二十七首新古今集に七首續後撰集に十四首入れり。家集に藤原基俊集（群書類聚二五五にあり）歌學上の著には悟目抄（群書二九一歌學全集十二）、撰集の著に「新撰朗詠集（群書三五一）あり。

【問題】　谷川士清に就きて知れる所を記せ。（第二十五回本）

【解答】　國語學の方から出た問題である。國語學には一假名遣二天爾乎波三活語四辭書の四部がある。其辭書としては和訓栞の著者であり、又活語の研究者としては動詞の活用の先鞭を着けた人である。この二方から見なければならぬ。

和訓栞は增補語林倭訓栞上中下の洋裝三册井上頼圀小杉榲邨增補明治三十一年七月發行。語の排列は二欄となり。上欄は增補語林で下は伴信友校閲倭訓栞となつてゐる。故に上と下と兩方を見ることが必要である。雅言集覽と共に德川時代の辭書の雙璧ともいふべきもので、語の說明は極て確實で、語の出典に紀記萬葉源氏等擧げてゐる。中古語よりも古語の方が特に勝れてゐる。著者は日本書紀通證も著してゐる。これは漢文で書き簡要を得た註釋書である。それから觀ても古代語については十分の研究がある。中古語及びそれ以後の語についてはあまり多くを望まれない。此の辭書について尙ほ二つの長所がある。それは五十音の順に語を排列してゐるのとア、行の於とワ行の乎との所屬が正しいことである。これより七八十年も後に出た雅言集覽がイロハ順に語を排列してある爲に、非常に見出し難くて困るのに、これは頗る便利である。オヲ所屬は宣長の字音假字用格（安永四年）にて正しく一定したので、この書はそれより三十年程前ではあるが、宣長と親交があつたからその注意を受けたものかと思はれる。本書は契沖の門人若沖の著の和訓類林（七卷）を模したものである。

活語の研究は一つは天爾乎波の係結から必要に逼られて來た。その結詞例へばぞといへば五音の中第三音、こそといへば第四音といふ風に活用が暗示される。一つは假名遣から活語の研究に入つた。（例へば持明院假名遣の中に、ハヒフヘホに通ふは皆ひを書く。習ヒフヘ、違ヒフヘ、縫ヒフヘとある等）かくまだ獨立して活用の研究が無かつたのを、士清出で延享四年に日本書紀通證を著し、五十音全行に渡れる活用圖を示し、動詞に語尾變化あることを知らしめたのである。だから宣長は語學界の猿田彦として士清を稱揚した。四段活用といふ名稱は後に春庭にて名づけられたのであるが、四段否五段に活用させて、オ列の音（遇オ書コ）は雅言に非ず詠歌讀書には古今不レ用ノ之と斷つたのは卓見である。中に悔ヤイユエヨといふ誤もあり、請ワキウエオといふ假名遣の誤もあるが、兎も角も大發見である。後二十二年を經て眞淵の語意考が出たが、眞淵は由來創作の人總合の頭であるから、士清に比して劣つてゐる。「ゆこ」は「ゆかも」の約など說明せるは士清の俗言と斷言したのに比しては餘程劣等と言はねばならぬ。これ等が基本となつて成章宣長を經て春庭の八衢となつたのである。

【問題】　新井白石谷川士清本居春庭の語學上に於ける事蹟を記せ。（大正九年第三十四回本試驗設問但）

【解說】　谷川士清のことは前に述べた。說明の都合上春庭についての解答を先にする。語學上動詞の活用を大成させた事蹟は特筆大書すべきでその著書は有名な詞の八衢である。又自動他動についての研究は詞の通路である。

活語研究の萠芽時代より創立時代の士清眞淵宣長成章を經て、文化三年（紀元二四六六年）に詞の八衢が世に出た。活版本は本居春庭太平內遠全集の中に收められてある。上下二卷約四五十頁の本であるが、これが劃時代的著述で誠に尊ぶべき書物である。先づ四段活用の次に一段活用（今いふ上一段）を置いて表につゞけてある。それは今いふ終止形と連體形とが同一であるから、そこへ着眼したのである。次に中二段（後に黑澤翁麿によつて上二段と改められた）次に下二段を示し、加行佐行奈行の變格（良行は氣づいてゐるが載せなかつた。後義門の玉の緒繰分で變格に加へ變格を四種とした。）を示し、形容詞の方は少し不十分ながら矢張り示してある。下一段は上古語としては下二段活用で中古語として始て蹴ると下一段となつたのだから之を省いてゐる。將然言などいふ名稱は後に義門がつけたので、春庭は第一第二といつてゐる。第一よりつゞく天爾乎波第二第三第四それ〴〵あげてある。餘程組織的頭腦を持つてゐたと見える。最も敬意を拂ふべきはア行（語尾が）の語、カ行の語として、紀記萬葉より以來各書にある動詞を悉く排列し、離解の詞には○をつけて一々出典を擧げて說いてある。その數は千四百八十四で、その學究的態度は實に感心である。多行からは下卷になつてゐたかと思ふ。活用語だけでも立派な辭書にもなる。これが後に影響を與へたことは、契沖の和字正濫抄以上で、宣長の詞の玉の緒と相並んで否寧ろそれ以上といつてもよい程である。富樫廣蔭の八衢捷徑や足代弘訓の八衢補翼や同人の八衢大畧中島廣足の八衢補遺、黑川春村の八衢附考、岡本保孝の八衢補正それから鈴木重胤が富樫の八衢捷徑の原本を門人なる山口敏樹が借寫せるを、之に己の名を署して世に出したといふ語學捷徑。八衢は語學を代表する語とまでもなつてゐる。八衢學者といふ一種の名稱さへ起つた位である。

詞の通路は八衢から二十二年後に出た。前にいつた全集に收めてある。上中下の三卷で、上卷は動詞の自他を詳しく定めてある。この中には受身も使役も含んでゐる。活用を研究すると自他は當然の歸結である。自他のことは本居派の完成者義門の活語指南や活語雜話等にもあるが、氣がついたのは春庭でしかも詳細的確に說いて、後の學者の金科玉條となつたのである。中の卷には掛詞等詞の兼用や詞の延約を述べ、下卷に文章篇ともいふべきことが說かれてあるのは珍しい。即ち天爾乎波のかゝる所のことで、文の脈絡である。かういふ研究は珍しい。歌の添削をする上に活用の誤から來る諸注意を述べ生クといふ語は中二段かと思つてゐたが源氏桐壺の「いかまはしきは命なりけり」等を引いて四段もあるといつてゐる。終に十首の歌がある。全集の夏山の歌は活字が誤つてゐる。通路といふ名稱は「世にふかくしげること葉の通ひ路はあとふみみてぞゆくべかりける」とあるより附けたのである。これに義門の部を加へると國語學の活語の部はざつと纏るわけである。（圖表參照）

新井白石は語學上から見て、一東雅（二十卷）といふ名詞に關する語原の辭書の作者であるといふこと。東雅は和訓栞に影響を與へたことは前にいつた。車はクル〳〵マハルからくるまといふ。雀ススはササ小いこと、メは小鳥である。ツバクラメのツバは澤（つや）クラは黑メは小鳥、ハマクリのクリは小石で濱にある小石である。天文の部日にはじまり歲時より虫豸に至るまで、二十に部わけしてある。享保二年（一三七七年）六十一歲の時の著作である。梵語及び宋元の音の輸入とか近世に於て西南洋の蕃語の輸入によりて國語の變化のあつた事をいつたのは白石獨特の長

所である。二、音韻を論じたのには東音譜(二年後)があり、三文字についての議論には同文通考五卷があり、卷一には文字の出來はじめのことから、六書のこと古文大篆小篆隷書を、卷二には艸行俗字押字を卷三に神代文字や漢吳音のこと、片假名伊呂波のこと、卷四に梵字點圖音韻假名釋文卷五に國字のことを論じてある。和蘭語にも通じ、漢語にも造詣深くして音韻の上に文字の上に辭書の上に功績を遺したる偉人である。

【問題】 新井白石の著書の主なるものを擧げよ。(大正四年第十九回本)

【解答】 一、歴史に關しては讀史餘論、藩翰譜、古史通。二風俗故實として、は本朝軍紀考俳優考、田制考、職官考三國語學としては東雅・同文通考。四隨筆としては白石紳書、折たく柴の記。五詩文に白石詩艸白石遺文あり。

國語學參考表 (但し極て主なものゝのみにとゞむ)

紀元	年號	假名遣	天爾乎波	活語	辭書
二三四九	元祿二	和字正濫抄(契沖)			
	六				
	八	和字通例全書(橘成員)			
	一一				
	一三	和字正濫要略(契沖)			
二三七三	正德三		和歌八重垣(有賀長伯)		倭爾雅(貝原益軒)
二三七七	享保二			日本書紀通證(谷川士清)	
二四〇四	延享四				和漢三才圖會(寺島安白) 東雅(新井白石) 和訓栞(谷川士清)?
二四二四	明和元				
	六	古言(魚彦)			
	七				
	八		紐鏡(成章)	語意考(眞淵)	
二四三三	安永二		網引綱蛛のすがき(樺井道敏)(宣長)		
	四	字音假字用格(宣長)	脚結抄(成章)	脚結抄の裝圖	
二四四二	天明二				
	八				
二四五五	寛政七	靈語通(上田秋成)	詞の玉緒(宣長)		
	十一				
二四六二	享和二				
二四六六	文化三				
二四七六	十三				
二四八〇	文政三				
	九				
	一〇	おを輕重義(義門)			
	一一				
二四九一	天保二				
	九	男(義門)ナマ信			
	一二				
二五一三	嘉永六		語學新書(鶏峯戊申) 助辭本義一覽(橋守部)		御國詞活用抄(宣長)
二五一七	安政四		片糸(中島廣足)	八衢(中島廣足) 八衢大訓(足代弘訓)	詞の八音(春庭) 詞の通路(春庭) 山口栞(義門) 玉の緒繰分(義門) 活語指南(義門)
					群書一覽(尾崎嘉雅) 雅語音聲考(鈴木朖) 言語四種論(川村瑞賢) 雅言集覽
					群書類從(塙保己一)

說明一、假名遣は國語の方契沖を代表とす。成員は反對し、魚彦は契沖の作を大成し、秋成は國語は靈なる故進音以て說げ、ウメムメ(萬葉に一所)のウ・ム・は通ずといふ假名遣無用論者也。義門はオヲ所屬の說を一層確めたる也。字音假名遣は宣長を推す。男信は字音假字用格の撰を正す。この欄すべて見方は二つ國語と字音と也。

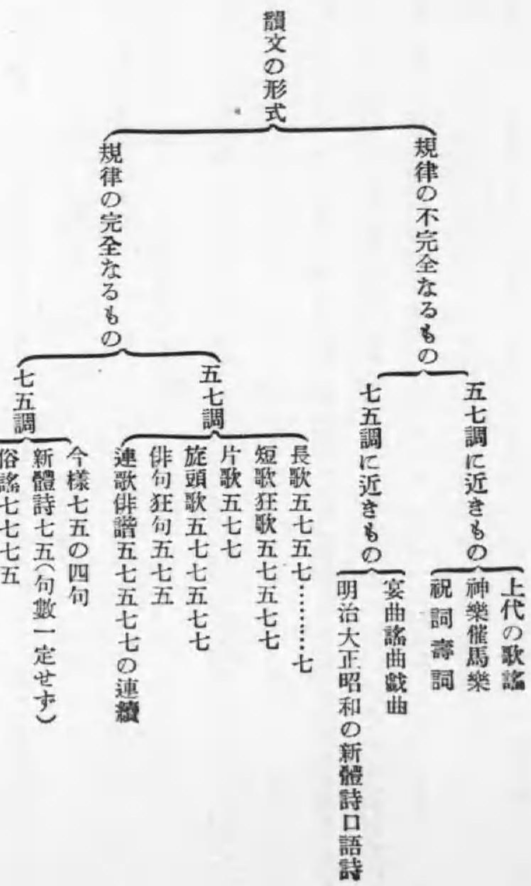
說明二、公卿仲間の天爾乎波研究の系統は長伯を經て脚結抄にて大成す。これ意味を主とす。係結は樽井より紐鍵玉の諸にける。これ形式を主とす。和圍文典よりの新しき見方は今日の文法に最も緣近し。音義より見たるは守部にして堀秀成之をうけて、助字音義考(音義全書上にあり)を著す。この欄すべて見方四つ一内容二形式即係結三和圍文典の見方四音義の立場也　假名遣と天爾乎波とは作歌の必要より生ず。二者未剖の萌芽時代としては悅目抄・八雲御抄あり。假名文字遣(定家假名遣)と仙源抄とは假名遣に關し、手爾波大概抄と姉小路手爾乎波抄とはその名の示す如く天爾乎波の書也。

說明三、假名遣と係結との研究は、必然のなりゆきとして活語の研究を生ぜしむ。而して八衢と山口栞之を說明し盡せり矣。

說明四、品詞の名稱については成章と義門と鈴木と鶴峯等也。雅語音聲考は珍しき創見のある書也。擬聲を以て語源を設く。俚言集覽安齋隨筆等この外有名也。古くは篆隸萬象名義(空海著)より新撰字鏡僕名類聚鈔等なり。

說明五、なるべく圖書館にて原の書につき研究せらるゝ一方、又指導を受くる爲に、斯道の著述を見ること肝要なり。

【問題】 一、國文學に於ける韻文の形式を說明せよ。(大正元年第二十六回豫)



【問題】 左の人物につき知れるところを記せ。(大正二年第二十七回本試驗設問)

松永貞德　伊勢貞丈　出口延佳

石川雅望　源順　阿佛尼

松永貞德　貞門の俳諧てふ語が誰しも耳にすることなるべし。貞德の本領は俳諧の鼓吹者たる點にあり。中興の功を奏したる點にあり、多くの門人を出したる點にあり。油糟淀川御傘の書を著して俳諧式目の基礎を定めたる點にあり。言語の遊戯的技巧より上には何程も出づる能はざりしが、兎も角特色をもちたる俳風をつくり出したる點にあり慶長三年八月前攝政藤原前久准后藤原兼孝の二人幽齋紹巴宗養等に命じて貞德を花咲翁と稱し、俳諧一道の宗匠と爲さしめ、又後水尾上皇より「花の本」の號を賜ふ。門下より季吟といふ大註釋家を出したる因緣とも思はるるは、貞德にも徒然草長頭丸抄、徒然草慰草等の著あり。當時の俳家には徒然源氏古今伊勢等は必須科目として研究せざるものなし。季吟註釋の種子は貞德に見るを得。物それ因無からんや。されど貞德は本領の方に忙しくして副業の方に手を伸す餘暇なかりしならん。傳記は野史(第二六一卷)、俳林小傳、俳家奇人談、滑稽太平記に據るを良しとす。

【備考】　松永貞德幼名を勝熊といひ、吉左衛門と稱す長じても猶ほ髪を束ね童服を着し自ら呼んで延陀丸又長頭丸とも云へり。逍遙軒と號す。父は松永久秀の子永種、母は藤原明融の女、名家の出也。貞德幼より藝能の道に志厚く、文學儒佛を兼ね、殊に一切經に通じ、天台の奥儀を極む。性勤勉にして一日片時も徒費せず、暇あれば詩賦を試み、和歌を詠む。和歌は玄旨法印(細川幽齋)に學びて悉く其傳授を受け、連歌は里村紹巴に親炙してその堂に入れり。宗鑑の犬筑波集の句式未だ完備せざるにより。淀川油粕の二書を撰み、(淀川は犬筑波の附句について批評し、油粕は犬筑波の前句を假り來りて自ら附句を試みて創作の範を示す。)又御傘(オカラカサ)の書を著して密かにその法式を辨ず。その深き學識と圓滿なる性格とは相依りて衆望を一身に集め、斯道の金科玉條として尊崇せられたり。晩年明を失ふ。明心居士はその折呼びし號也。和歌俳諧等の著述多し。歌書には戴恩記(一名歌林雜話)あり、續詳書類從又は存採叢書にあり。徒然草尉草・百人一香抄百首・消息和句解堀河百首抄(一名肝要抄)逍遙軒抄・源氏覺束歌・歌林樸林・前車集・紅梅千句・貞德家集・徒然草長頭丸抄等あり。　俳諧に關する說明は本講座第一冊顯原講師俳句俳文評釋六頁より十八頁までに據らるべし。

伊勢貞丈　貞丈雜記や安齋隨筆(安齋はその號)にて有名也。有職故實殊に武家時代の方に詳し。その著述は故實叢書の中に收められたり。天明四年(二四四四)年七十にて歿す。安齋叢書の中にも天爾乎波の說あり。即ち現在過去未來疑下知願などの名目を立てたり。(こゝに所謂天爾乎波は廣き意味にして助詞助動詞を含む)

出口延佳　古事記の註釋書の中に出で來る人也。鼇頭古事記鼇頭舊事記中臣祓拾穗抄神名帳考證陽復記等の著あり。伊勢外宮の祠官にてし神道を以て政治の大本人倫の根源となし、之を周易の理にあてゝ、解釋を試み、かの易道は自ら我が神道の旨に合ふといへり。　此に於て古來の度會神道は佛教趣味を脫して、甚しくその內容を改めたり。姓は度會、元祿三年歿年七十六。

石川雅望　語學の方面にては雅言集覽の著者として名高く、狂歌にては宿屋飯盛として有名なり。源氏物語の註釋書としては源注餘滴あれども、註釋家としては到底辭書編輯の能力に及ばず。その家は旅店なりしが性學を好み和漢雅俗に亘り、古語を巧に用ひて小說を作り、又優美なる古語を以て自由自在に通俗の事物事件を描寫し、又唐衣橘洲蜀山人等につきて狂歌を學びてその堂に達し、小說狂歌狂文等の通俗文學もて世に知らるゝのみならず、著實なる古學上の研究をもなせり。天保元年(二四九〇)年七十八にて歿す。小說に近江縣物語、飛驒匠物語、紙魚(シミ)の住家物語」等あり。雅文には北里十二時・都のてぶり等あり。狂文集に東なまりあり。

源順　語學の方よりは和名類聚抄二十卷の著あり。これは新撰字鏡に次ぎて古き字書にして延長年中勤子內親王の命を受けて撰みたるもの也。天地歳時鬼神人倫などより草木虫豸に至るまで四十部二百六十八門に分ちて倭名を記し、文字の出處を記されたるものにして專ら詠歌の爲に作れるものと思はる。これに文政十年狩谷掖齋の注したる箋註和名鈔十卷ありて考證精細にしてよろしき書物也。歌人としては後撰集撰者の一人即ち梨壺の五人の一人也。歌は拾遺に二十首後拾遺に三首玉葉集に六集入れり。家集に源順集（群書類從二四八）あり。詩文は扶桑集本朝文粹に出づ。竹取物語宇津保物語等のと著者まで擬せらる。これも根據なき說なれども、またいかに學者として尊ばれしかの一證となすに足る。圓融天皇の永觀元年（一六四三）年七十三にて歿す。河原院の賦强臭滅兮有荆棘。姑蘇臺之露滾々。暴秦衰兮無虎狼。咸陽宮之煙片々は有名にして本朝文粹一、和漢朗詠集雜、十訓抄第二等に見ゆ。

阿佛尼　十六夜日記にて知られたり。鎌倉時代に出でし女流歌人且つ和文家にして歌人藤原爲家の後妻なり。初め順德天皇の皇后安嘉門院に仕へ、安嘉門院四條と稱せらる、後爲家に嫁し、爲相爲守を產む。然るに爲家が先妻の子に爲氏爲敎あり、爲家の歿する時、俊成以來和歌所の所領として世襲し來れる播州細川庄江州小野庄をば嫡子爲氏に讓らず、遺言して爲相に讓る。爲家歿後、爲相幼少なりしかば爲氏之を押領す。因て阿佛尼之を訴へんとて鎌倉に下る。此の訴訟は阿佛尼の勝訴となりしが、阿佛尼は弘安六年鎌倉にて死したり。十六夜日記に悲哀の情の充ちたるはこの爲なり。歌は續拾遺集に六首玉葉集に十一首風雅集に十五首入れり。歌學書には夜の鶴（群書類從二九二）あり。和文には十六夜日記の外に「めのとのふみ」（群書四七七）あり。（阿佛尼の傳については大日本史に據るを良しと思ふ）

【問題】 左の場合に於ける品詞轉成の例を示せ。（大正元年第二十六回本試驗）

（イ）名詞より動詞に　（ロ）動詞より副詞に

（ハ）名詞より形容詞に

【解說】（イ）名詞より動詞に轉成せる例

令ニ（ノリゴチテ）軍中一曰且ク停レ（神武紀）

若きをのこのをかしううちさうぞきたる（枕草子）

北野と世をまつりごたせ給ふ。（大鏡）

とかくの事をもものんだはずして（謠曲安宅）

以上の例は（宣言ノリコト）裝束（サウゾク）政事（マツリゴト）問答（モンダフ）の語尾ト・ク・ト・フを活かしたる例なり。即ち名詞の語尾をそのまゝ活用せしめて動詞に轉成せしむ。語尾る・す・む・ふ・ぶ・ぐの中最も多きは「す」と「る」と也。

次は名詞に語尾を加へて動詞に轉成せしむ。

縊る　首といふ名詞にルを加ふ。

彫る　繪といふ名詞にルを加ふ。

取る　手をトに通はしそれにルを加ふ。

粉す（コナす）　コナといふ名詞に爲（ス）を加ふ。

物す　物といふ名詞に爲を加ふ。佐行變格活用は皆是也。

股ぐ　香ぐ(嗅)　綱ぐ(繋)

力む　腹む(孕)　宮ぶ　鄙ぶ　臍ぶ(フキト)。

次は名詞に接尾語めく・さぶ・ぶる・ばむ・めかす・だつ・なふ等のつきて動詞に轉成す。例春めく・神さぶ・學者ぶる・けしきばむ・けしきだつ・音なふ・時めかす等なり。(廣文典二四一頁參照)

概括名詞より動詞へ
(一)名詞の語尾を活用せしむ。獨どつ。
(二)名詞に語尾を加ふ。彌次る。
(三)名詞に接尾語を加ふ。春めく。

(ロ)動詞より副詞へ
(一)動詞そのまゝ　例　あまり高きは覆り易し。
(二)動詞　(イ)連用形に「て」「に」の添りて　あまりにみだりに　まして　たえて。
(ロ)連體形に「に」の添はれるもの　思ふに　察するに
(ハ)未然形に「ず」の添はれるもの　殘らず・絶えず等。
(三)動詞の疊語　ゆく〳〵　おひ〳〵　泣く〳〵
(四)動詞の延言　思へらく　いはく　願はく
(五)接尾語の加はりて　忍びやかに　延びやかに
動詞の語幹に加れるは　さだかに　ひそかに　ふくらかに等とす。

(ハ)名詞より形容詞に
(一)名詞に「し」といふ語尾をつけて　白し　大人し。
(二)疊語の名詞に「し」をつけて　花々し・よそ〳〵し。ををし。
(三)けし・がまし・らし等接尾語をつけて、例　をこがまし・露けし・男らし・人らし等なり。

【問題】 左の動詞の活用を示せ。(大正元年第二十六回豫備)

考報　堪用　桑　悶　据
敎　抑　誣

【問題の見方】 動詞の假名遣卽ち何行に活用するか。是れは基本で次に活用を考ふべきである。

【解說】

	未然形	連用形	終止形	連體形	已然形	命令形
考ふ	へ	ふ	ふる	ふれ	へ	へ(よ)
報ゆ	い	ゆ	ゆる	ゆれ	い	い(よ)
堪ふ	へ	ふ	ふる	ふれ	へ	へ(よ)
用ふ	ひ	ふ	ふる	ふれ	ひ	ひ(よ)
桑ゆ	え	ゆ	ゆる	ゆれ	え	え(よ)
悶ゆ	え	ゆ	ゆる	ゆれ	え	え(よ)
据ゑ	ゑ	ゑ	ゑる	ゑれ	ゑ	ゑ(よ)

教ふ　へ　へ　ふ　ふる　ふれ　へ（よ）
抑ふ　へ　へ　ふ　ふる　ふれ　へ（よ）
誣ふ　ひ　ひ　ふ　ふる　ふれ　ひ（よ）

【備考】一、今日の問題なれば口語の活用も考へねばならぬが、大正元年頃はまだ文語だけの活用を問うたものと思はれるから、口語は書かずにやめた。

【備考】二、命令形の下につく「よ」は感動の助詞で呼びかけの作用をする語ゆゑ、括弧の中に入れたのである。

【備考】三、動詞活用の假名遣をひと通り心得置くべきである。これに三種ある。その一つは阿行也行和行波行の見わけである。これは少い方の阿和也三行を覺えて他は波行とする。

阿行一つ　得（下二段）
和行六つ　植う　飢う　据う（下二段）
居る　以る　率る（上一段）
也行四十二語　射る　鑄る（上一段）
老ゆ　悔ゆ　報ゆ（上二段）
あゆ（肖）　あゆ（熟）　あゆ（滴）　甘ゆ　いばゆ（嘶）　癒ゆ　饜ゆ　覺ゆ　おもほゆ（思）　聞ゆ　消ゆ　凍ゆ　肥ゆ　越ゆ
榮ゆ　冴ゆ　しなゆ（嬶）（波行にも用ふ）餒ゆ　そばゆ（戯）（波行にも用ふ）　變ゆ　絶ゆ　つひゆ（費）　つひゆ（潰）
つひゆ（斃）　痿ゆ　煮ゆ　はゆ（生）　はゆ（疾）　冷ゆ　殖ゆ　ほゆ　まみゆ　見ゆ　悶ゆ　もゆ（燃）　もゆ（萌）　わかゆ
（下二段三十七語あり。）

この外は波行と心得てよい。波行の動詞の例を擧げると

波行四段の語。この語尾はアイウエと發音するもの、すべてこの語である。　遭ふ　言ふ　買　食　乞等。

波行上二段の語　誣ふ　强ふ　懸ふ　等。

波行下二段の語　與ふ　憂ふ　衰ふ　考ふ　加ふ　答ふ　支ふ　貯ふ　堪ふ　湛ふ　交ふ　仕ふ　唱ふ　捕ふ　迎ふ　辨ふ

敎ふ　添ふ等（此の外なほ多し。）

そこで上二段の語は也行の三語老悔報（の記憶法として老いて悔ゆるはその報いなりとでも文にするも（可）の外すべて波行と心得てよい。本問題の報用誣はその智職を試みたのである。但し用は和行下一段にも活用するが、本問題は波行上二段を採ったものと見える。

次は下二段の見わけ方

和行は三語　飢植据

也行は三十七語その性質はすべて自動詞である。故に他動詞ならば波行下二段と認めて良い。本問題の考教抑はそれで見わけられる。但し自動詞はすべて也行といふ逆は利かぬ。波行にも自動詞がある。堪答等は波行下二段の自動詞である。故に三十七語を記憶するか。又は右に○を附けた語十を記憶して他の二十七語は

あやかる　甘やかす　癒やす　おびやかす　消やす　肥やす　越やす　等す（稀にはかす・かる）をつけて、也が出るのを見て也行と知るがよい。

殘る十語

嘶　覺　思（おもほゆ）　聞ゆ　凍　榮　吼　見（ミユ）　悶　の記憶としては試に

まみえしに榮えし昔おもほえて見え聞えにて悶ゆなりけり（この文句で六語を疊える）

犬吼え馬嘶え寒さ凍ゆるかと疊ゆ（これで四語を疊える）

本問題にたちかへつて言へば、榮悶はこれでわかる。

動詞活用の假名遣の二はダ行ザ行のわかちである。

三段に活用するのはザ行

二段に活用するのはダ行

但し混ずは二段であるが、これだけは別でザ行である。

論ず感ず任ず等（音讀の語は三段に活用する）

肯ず甘ず重ず（撥音便の語は三段に活用する）

恥づ閉づ綴づ攀捻づ（上二段）

出づ秀づ諂づ撫づ奏づ（下二段「で」の發音にてもわかる。）

動詞活用の假名遣の三は轉音の或る場合。

湛　たたふ　を　たとふ　と誤り

疊　たたふ　を　たたふ　と誤る。

これは「へて」又は「へば」を下につけるとわかる。

支ふ　厭ふ　控ふ　迎ふ　傳ふ　誘ふ　揃ふ　整ふ　唱ふの右側に假名をつけて見よ。

（完）

國文學講座

全二十八冊の内

問題解說

昭和五年十一月十日印刷
昭和五年十一月十八日發行

第十輯三冊の内
（非賣品）

（第八回配本）

編輯兼發行者　受驗講座刊行會
右代表者　加藤雄策
印刷者　濤川薫
東京市麹町區下六番町一〇

發行所　東京市麹町區下六番町一〇
株式會社平凡社内
受驗講座刊行會
振替口座東京二九六三九番

株式會社平凡社印刷部印行

910.8
K0453
(20)

終